

## 大品般若經の方便思想

日 下 俊 文

比較すると次の如くである。

	6	5	4	3	2	1		
	権巧方便 施造方便 施他方便 前三いづれにも通ずる方便に 虚仮方便 大品独自の方便							
小品般若			十六回	七回	八回	三十九回		
大品般若	七十三回	十五回	三回	四十七回	五十五回	五十九回		
合計	二百四十回							

方便思想が般若經典ではどのように現われているかを検討するために、昨年度の学会ではその第一着手として「小品般若の方便思想」を取りあげたが、本年度はその連続として「大品般若の方便思想」の検討へと進めたいと思う。周知のように『小品般若』は二十九品からなるが、それが『大品般若』になると増広拡大されて九十品の組織をもっている。まず用語の調査を進めた結果、羅什訳『小品般若』には七十三回の方便の用語が見い出されたが、これが『大品般若』（羅什訳）になると二百四十回を数えられるので、数量的には三倍強になるのである。次に『大品般若』のどの品に方便思想が現われているかを見ると、小品より大品へと増広された部分、すなわち第六十八品以下に特に現われていることが知られる。しかも『小品般若』の方便思想には①権巧方便、②施造方便、③化他方便、④前三いづれにも通ずる方便、⑤虚仮方便などの方便思想がみられたが、『大品般若』にはどのような方便思想がみられるであろうか。用例の上から大小品を

『大品般若』にあらわれた独自の方便思想は、諸法に執着するものに対して般若智をもってあらゆる「手だて」を用いて執着より遠離せしめる利他菩薩行の具体的展開にあるといえよう。つまり大品になると「方便」「方便力」による利他行の力説であって、その内容も多種多様化して説かれ「神通波羅蜜」等を説いて具体的利益衆生道を説いているのである。

はじめに『大品般若』の方便思想中、『小品般若』の方便

思想を受け継いでいるものについて検討すると、『大品般若』では共通して化他思想、空觀思想を強調し説示されているのである。(但し虚仮方便はのぞく)、つまり『大品般若』にみられる方便思想の傾向としては、利他行の強調と利他行そのものもまた空であるという空觀の力説にあるといつてよいと思う。いま『大品般若』にみられるこれらの傾向を示す次のようになる。

1 権巧方便 大品般若(羅什訳)第五十一品(大正八、三三〇上)

須菩提、善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を求め、諸の信、忍、淨心、深心、欲、解、捨、精進有れば般若波羅蜜方便力の守護する所となり、禪定、精進、忍辱、持戒、布施乃至一切種智の守護する所となるが故に、須菩提、当に知るべし、是の人中道にして衰耗せず。声聞辟支仏地を過ぎ、能く仏国土を淨め、衆生を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を得る。

同、第五十四品(同、三三七上)

世尊、我れ仏の所説の義を解するが如く、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜方便を遠離せざれば、当に知るべし是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に近づけりと、……中略……菩薩道を求むる善男子善女人有り、般若波羅蜜及び方便力を遠離せば、当に知るべし是の人は阿耨多羅三藐三菩提に於いて或は得、或は不得と、何を以ての故に、世尊、是の菩薩道を求むる善男子善女人の有ゆる布施皆相を取り、有ゆる持戒忍辱精進禪定皆相を取る、是を以つての故

大品般若經の方便思想(日下)

に、善男子善女人は阿耨多羅三藐三菩提に於いて定まらず。

2 施造方便 同、第五十七品(同、三四六下)

世尊、菩薩摩訶薩は方便力を以つての故に、諸法に於いてまた相を取らず、また相を壊せず。何を以つての故に。世尊是の菩薩摩訶薩は一切種法の自相空なることを知るが故に、菩薩摩訶薩は是の自相空中に住し、衆生の為の故に三三昧に入り、この三三昧を用いて衆生を成就す。

3 化他方便 同、第八十八品(同、四二二上)

長者女及び五百の女人は清淨信心し、曇無竭菩薩を敬重し、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を発し、是の願を作して言はく、曇無竭菩薩の如く菩薩の諸の深法を得、曇無竭菩薩の如く般若波羅蜜を供養し、曇無竭菩薩の如く大衆の中に於いて般若波羅蜜の義を演説し、顯示し、曇無竭菩薩の如く般若波羅蜜方便を得、神通を成就し、菩薩事の中に於いて自在を得ること、我もまた当に是の如くすべし。

4 前三いずれの義にも通ずる方便 同、第三十四品(同、三八六下)

是の菩薩摩訶薩の方便力は皆般若波羅蜜より生ず。菩薩摩訶薩は是の方便力を以つての故に、檀那波羅蜜乃至禪那波羅蜜、内空乃至無法有法空、四念処乃至十八不共法を行じて声聞辟支仏地を証せず。また能く衆生を成就し仏国土を淨め、壽命成就し国土成就し、菩薩の眷属成就し一切種智を得る、皆般若波羅蜜より生ず。

三七一

（。。印は大品で増加したものである）

ここでは『大品般若』の増広されているのは「成就衆生」で示される利他思想と空觀の強調であることが知られる。化他方便では神通が方便と関連して説示されている。また小品にみられず菩薩の方便と関連して説かれているものに「墮頂」の菩薩がある。つまり三界の惑を離れはするが、法愛が生じて化他行に進まぬ菩薩は頂に墮すといわれる。この菩薩は『放光般若』では「墮声聞辟支仏他亦不順菩薩道」とあり、玄奘訳では「退墮声聞或独覺地 不菩薩正性離生」とある。しかし羅什訳は「不墮声聞辟支仏地」とあり、『大智度論』も同様にあるのでこの「墮頂」とは二地に墮すことと同義とは断定できない。

5 虚仮方便については、『小品般若』のそれと変りない。

さて以上の例のように『大品般若』の化他、空觀を力説する傾向は、第七十三品に次のように説かれる。「方便力を成就するが故に、諸禪定自相空無定相無所転を知り、仏国土を浄め、衆生を成就し、精進し世間の果報を受けず、但だ一切衆生を救度せんと欲するが故に毘梨耶波羅蜜を行す」（同 三八〇中）、また第七十一品には「菩薩摩訶薩は能く諸法の無性を学し、またよく仏国土を浄め、衆生を成就して、国土も衆生もまた無性なりと知る、即ち是れ方便力なり」（同 三七八中）と、ここでは「方便という言葉自体が空觀

と大悲の両方の意味を擔っている」のである。

次に『大品般若』になつてはじめて現われる方便思想は化他方便の著るしい強調と具体的活動としての身を種種の形に化作すること、神通波羅蜜を生む方便等であり、これらには十五回の用例がみられる。第六十九品には「我れもし方便力を行ぜざれば、衆生を生死より度脱すること能わず」（同 三六九中）、この「方便力を用いて神通波羅蜜を生じ」、「もし菩薩、神通波羅蜜を遠離せば、転じて衆生を饒益すること能わず」（同 四一〇中）、つまり衆生を利益する目的である菩薩道は、方便や方便力より生ずる神通波羅蜜に依らなければ菩薩道を成就することが出来ないのである。（『放光般若』では「不具神通不能教化淨仏国土」として神通波羅蜜とはしない）「菩薩は神通なければ、意に随つて衆生を教化すること能わず。是を以つての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて応に諸の神通を起すべし、諸の神通を起し已りて、若し衆生を饒益せんと欲せば、意に随つて能く益す」（同、四一〇中）、『大品般若』には方便力と関連して神通波羅蜜を説き、さらにこの神通を行じて、種々に身を化作して衆生を饒益することが説かれているのである。

世尊、菩薩摩訶薩の大方方便力は聖無漏智慧を得て、而して度すべき所の衆生の身に随つて、種々の形を作し以つて衆生を度す。

（同、四一〇上）

ここで示される方便力は種々に身を化作すること自在であつて、「方便力をもつての故に、身を變ずること仏の如く」である。衆生を利益せんがために六道生死に入つて生死を受け、またある時は「金色身三十二相八十随形好をもつて、無上法宝を一切衆生に分布し与える」のである。これらの方便思想は未だ『小品般若』には現われなかつたものである。

次に小品より大品になると二諦説が説かれるが、この二諦説と方便説との関連をみたい、二諦は世諦と第一義諦であるが、大品では世諦は差別の言説界、第一義諦は無分別無言説の絶対界である。この二諦説は大品の拡大部分に多く説かれており、ここでは方便と世諦と同義に説かれるところがあつる。すなわち「諸法実相は不可説なり、而るに仏は方便力を以つての故に説く」といい、世諦についても「一切法は皆世諦を以つての故に説く」というので方便と世諦とはほぼ同義である。次に第一義諦については、絶対界の第一義には身口意の三業はないが「身口意の行を離れずして、第一義を得」、この「第一義を得て一切法を度たり、彼岸に至る」のである。つまり世諦によつて第一義を得るのである。また方便と二諦については「二諦の中に住して衆生の為に世諦と第一義諦とを説法す……中略……二諦の中に衆生得べからずと雖も、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるに方便力を以つての故に、衆生のために説法す」(同、四〇五上)るのである。

小品般若経の方便思想(日下)

つまり二諦に住して衆生のために説法することは方便力の故であるから、世諦は方便力によるのである。「世俗諦に依る説は一般常識に於ける思想分別に訴える教説をさし、第一義諦が総じて思惟分別を絶した分別憶想を超えた即ち無分別智の領域、抽象概念や単なる観念を超えた体験実証の境地境涯を指すものといえる」。大品の化他方便は第一義に住した菩薩のはたらき、すなわち世諦であり、またこの方便を受ける方よりみれば権巧方便施設方便であるから、世諦即方便とみてよいであろう。またこの世諦と絶対界の第一義とは異なるという。第七十一道樹品には「世諦と第一義諦とは異りなきなり、何を以つての故に、世諦の如は即ち第一義諦の如なればなり」(同、三七八下)という。つまり分別を超え、無言説無分別界の絶対界に住しながら文字分別に帰り妙有の世界を実現する思想が二諦説中にみられるが、ここには菩薩の利他のはたらき、つまり第一義に住した菩薩の具体的分別表現である世諦も第一義諦と異ならないと示している。ここに後世の方便即真実といわれる素地が窺えるのである。

詳細は西山学报29号「方便思想の展開(二)」参照。

(西山短期大学講師)